



COMPARATIVE ADVANTAGE, FIRM EFFICIENCY AND PRODUCTIVITY: A COMPARATIVE STUDY OF THE GARMENT INDUSTRY IN CAMBODIA, LAOS AND VIETNAM

Souksavanh, VIXATHEP

(Degree)

博士 (経済学)

(Date of Degree)

2009-03-25

(Date of Publication)

2010-05-26

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲4496

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1004496>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



氏 名 Souksavanh VIXATHEP
博士の専攻分野の名称 博士（経済学）
学 位 記 番 号 博い第 4496 号
学位授与の 要 件 学位規則第 5 条第 1 項該当
学位授与の 日 付 平成 21 年 3 月 25 日

【 学位論文題目 】

COMPARATIVE ADVANTAGE, FIRM EFFICIENCY AND PRODUCTIVITY: A COMPARATIVE
STUDY OF THE GARMENT INDUSTRY IN CAMBODIA, LAOS AND VIETNAM （比較優位、
企業効率、および生産性 — カンボジア・ラオス・ベトナムの縫製産業に関する比較研究）

審 査 委 員

主 査 教 授 松永 宣明
 教 授 駿河 輝和
 准教授 川畑 康治

学位請求論文審査結果報告要旨

論文内容の要旨

博士学位論文

論文内容の要旨および審査結果の要旨

氏 名 Souksavanh VIXATHEP

学位の種類 博士(経済学)

学位授与の条件 神戸大学学位規程第5条第1項該当

学位論文の題目 COMPARATIVE ADVANTAGE, FIRM EFFICIENCY AND PRODUCTIVITY: A COMPARATIVE STUDY OF THE GARMENT INDUSTRY IN CAMBODIA, LAOS AND VIETNAM
(比較優位、企業効率、および生産性 — カンボジア・ラオス・ベトナムの縫製産業に関する比較研究)

審査委員 主査 教授 松 永 宣 明
教授 駿 河 輝 和
准教授 川 畑 康 治

本論文の目的は、(1)カンボジア、ラオス、ベトナムの1985～2005年における比較優位構造の変化について分析すること、および(2)これら3国における縫製産業の国際競争力を左右する縫製企業の効率性について分析し、縫製産業がさらに発展するために必要な条件を明らかにすることである。

本論文は6つの章から構成されている。各章の概要は以下の通りである。第1章では、研究の背景、目的、意義、限界について説明されている。第2章では、比較優位指標に関する先行研究、使用される貿易データ、インドシナ3国の経済発展についてまとめられている。なお、既存のデータがそのまま使用できるのはカンボジアでは2000年のみ、ベトナムでは2000年と2005年のみであり、その他のデータは貿易相手国のデータを利用して作成されたものである。

第3章では、インドシナ各国における比較優位構造の変化がRCA(Revealed Comparative Advantage)指標とNE(Net Export)指標によって示され、これら3ヶ国の1985～2005年における貿易構造変化が概ね新古典派的発展経路(農産物から労働集約的な軽工業品へ)に沿ったものであり、またベトナムを除き輸出品の多様化は余り進んでいないことが明らかにされている。これらの比較優位指標は、SITC3桁分類で計算されているが、輸出金額とシェアが大きく、比較優位があり、経済発展と貧困軽減に重要な役割を果たしている共通の産業として縫製産業が選出されており、以下の章ではこの産業に焦点を当てた分析がなされている。

第4章では、縫製産業をめぐる世界の動きとインドシナ3国における縫製産業の概要、企業の技術効率性と全要素生産性の変化に関する先行研究と本論文で用いられる方法(DEA = Data Envelopment Analysis : 包絡分析法, SFA = Stochastic Frontier Analysis : 確率的フロンティア分析法, Malmquist 指標) について簡潔に説明されている。ここで特筆すべきことは、2004年までMFA(Multi-Fiber Arrangement : 多国間繊維取決め)の下で欧米諸国への輸出にはクォータが適用されたため、中国・台湾・韓国等がインドシナ3国に生産拠点を移した結果、これら諸国において縫製産業が急激に発展してきたことである。2004年末をもってMFAが廃止された結果、2005年には中国等による欧米諸国への輸出が急増し、これに対応するためEUと米国は中国に対して2008年までの緊急輸入制限措置を発動したが、MFAの下で縫製産業を発展させてきたインドシナ3国は、この一連の変化によって大きな影響を受けている。MFAの廃止によってインドシナ3国の縫製産業が存亡の危機に立たされているという危機意識が、本研究の背後にあると言える。

第5章では、インドシナ各国の縫製産業について近年の動きがまとめられた上で、縫製企業のデータを用いた計量分析の結果が示されている。まずカンボジアについては、2004年のデータを用いてDEAによる分析が行なわれ、企業所有者の国籍によって技術効率性が異なる(韓国を除き外国企業の方がカンボジア企業よりも効率性は高い)こと、企業の効率性

を左右する要因としては国籍以外に外国人労働者比率、平均賃金、資本・労働比率、プノンベンへの立地があり、前2者はプラスの影響、後2者はマイナスの影響があるが、外国人労働者比率による影響はわずかでしかないことが明らかにされている。なお、企業の操業年数と製品の種類は、企業の効率性に有意な影響を与えていない。

ラオスについては、2004年と2005年のパネルデータを用いてDEAとMalmquist指標による分析が行なわれ、企業所有者の国籍によって技術効率性は異ならないこと、企業の効率性を左右する要因としては労働者に対するスタッフの比率のみが有意であること、2004年から2005年にかけて縫製産業の全要素生産性は大きく低下しているが、その原因のほとんどはマイナスの技術進歩にあること、全要素生産性低下の程度は合併企業では有意に低いが、その原因は合併企業のみ技術効率性と規模効率性が大きく改善しているためであることが明らかにされている。マイナスの技術進歩が計測されているが、その原因は2005年にMFAが廃止された結果、欧米諸国からの注文が急減したこと、国際競争激化により製品価格が低下したことなどによると説明している。

ベトナムについては、2006年のデータを用いてDEAおよびSFAによる分析が行なわれている。しかも、476社のサンプルが得られたので、中小企業と大企業とを区別して分析し、大企業では企業所有者の国籍によって技術効率性は異ならないが、中小企業では国有企業より民間企業、国内企業より外国企業の方が効率性は高いこと、大企業では平均賃金のみ企業の効率性に影響を与えているが、中小企業では平均賃金に加えて民間企業であることと資本労働比率が企業の効率性に影響を与えていること、どちらも企業の操業年数は企業の効率性に有意な影響を与えていないことを明らかにしている。また、DEAによる分析でもSFAによる分析でも以上の結果は概ね同じであるが、SFAでは大企業においてはどの要因も企業の効率性には有意な影響を与えていない点が異なっている。

これら3ヶ国の技術効率性を比較しても、国によりサンプル数や調査年が異なり、また国ごとにフロンティアが異なるため、その優劣について論じることはできない。しかし、効率性の最も高い企業に対して、全体の企業が平均でどの程度の効率性を実現しているかという、相対的な効率性の程度については述べることができる。この値はベトナムで最も高く(0.62)、ラオスでは最も低く(0.33)、カンボジアは両者の中間(0.44)であり、これから企業効率の分散の程度はラオスが最も大きく、ベトナムが最も小さく、カンボジアは両者の中間にあることが分かる。

第6章では、これまでの分析結果を要約し、各国に対する政策的含意を示唆し、今後の研究課題について述べている。

本論文は、カンボジア、ラオス、ベトナムについてマクロ・ミクロ両面から比較分析を行なったものであり、インドシナ3国に関するこの種の包括的な比較研究はこれが初めてである。しかも、すべての国で縫製産業について現地調査を行なった成果を生かして分析結果を明解に解釈しており、この種の研究としては優れていると言える。

本論文の主たる貢献は、以下の3点にまとめることができる。

第1は、3ヶ国についてRCA指標とNE指標という共通の指標で20年間にわたる比較優位の変化を丹念に分析し、3ヶ国における貿易構造の変化が概ね新古典派的発展の経路に沿ったものであることを示したことである。これらの諸国は共通して最貧国であり、また約20年前から対外開放と市場経済化による「正常な」経済開発を始めたという共通の特徴を持っている。各国の発展水準は多少異なるが、比較優位指標によって貿易構造を見た場合、農産物から労働集約的な軽工業品(縫製品を含む)へ比較優位が移っている点が明確に示されている。

第2の貢献は、各国における縫製産業の重要性をマクロデータで確認した上で、ミクロの企業データを用いて縫製産業の国際競争力を左右する縫製企業の技術効率性とそれに影響を与える要因を分析し、有益な結論を導き出していることである。DEAという分析手法を用いることにより生産関数を特定化することなく技術効率性を計測し、それを被説明変数として企業の技術効率性を規定する要因を推定しているが、これは情報の極めて少ないインドシナ3国について分析するには適切な方法であろう。特に、国有企業が多いため利潤最大化行動を仮定できないベトナムについて分析するには最適な方法と言える。

第3の貢献は、MFA廃止前後のラオス企業のパフォーマンスの変化をMalmquist指標により分析している点であり、このような研究は重要であるにもかかわらず、ラオスではこれまで皆無であった。しかも、分析結果を解釈する際には2度にわたる現地調査の成果を十分に生かして、説得的に解釈することに成功している。このような現地調査の成果を生かした解釈はラオスだけでなく、カンボジアとベトナムでもなされており、計量分析の結果を単に示すのではなく、十分に意味づけすることを可能にしている。

本論文に求められる改善すべき点と今後さらに分析を深化する方向として、次の2点が挙げられる。

第1は、研究で用いられている方法論についての説明が簡潔に過ぎることである。論文全体の分量を配慮して簡潔にしたということであるが、もっと丁寧に説明すべき所が散見され、この点は改善すべきであると思われる。

第2に、3カ国の比較研究をしているにもかかわらず、肝心の技術効率性について比較

分析が行なわれていないことである。もちろん、国によりデータや調査年が異なり、また国ごとにフロンティアが異なるため、単純な比較はミスリーディングな結果を導くことになりかねない。しかし、何とか比較可能なデータを入手して比較分析を試みることを今後の課題として挙げておきたい。

しかし、これらの点は今後のさらなる研究に待つべきものであり、現時点での本論文の価値を何ら損なうものではない。

以上を総合して、下記の審査委員は一致して、本論文の執筆者が博士（経済学）の学位を授与されるに十分値すると判断する。

平成 21 年 2 月 2 日

審査委員

主査 教授 松永 宣明

教授 駿河 輝和

准教授 川畑 康治